

日本応用心理学会第31回大会シンポジウム資料(於立教大学／1964年7月4日)

Teaching Machine に関する心理学的諸問題

学習指導の問題点とプログラム学習

矢 口 新

(一) 学習指導の目標観に問題がありはしないか

わが国の学習指導の目標には、理解ということが非常な重味をもっている。平たく言えばわかるということであるが、このわからせればよいということが、問題ではないであろうか。

例えば国語の教材について、それをわからせることが果して学習指導の目標であってよいのか。一つ一つの教材がわかっていけばよいという考え方と、それがある能力を育てる教材だという考え方とはちがうのではないか。後者の場合は、教材が練習という意味をもって来る。現在の目標観はそういう考え方とはちがった方向にあるように思われる。

或は社会科という教科の例をとってみると、社会科の教科書の中に書かれている事柄を理解することが学習指導の主たる目標になっているように思われる。しかし社会をみることができるようになることが社会科の目標ではないだろうか。社会をみる能力を育てるのは、社会科の教材を解説し、それをわからせることと一致するのであろうか。こういう考え方の筋には何か欠けているのではないか。

以上のことを一般的に言えば、わからせるということと、できるようにしてやるということとをもう一度わけて考えてみる必要がある。それはできるということと、わかるということのちがいははっきりさせることでもある。

われわれの目標観では、できるという言葉を使うときでも、それが行動能力という意味をもたないことが多い。国語ができるという使い方、社会科ができるという使い方は、必ずしも正しい言葉の使い方でのできることではない。それはテストの成績である。こういう使い方が正しい意味でのできるということを問題にしていないのは、行動の時間的性格が問題になっていない所にあらわれている。例えば国語の何百字を何分間で読みこなすというような能力の目標はわが国では考えられないことである。つまり学習指導の目標が抽象的だとも言えよう。

(二) 教師中心の学習指導の生れる所以

わからせるということで授業が行なわれると、教師と生徒の活動で行われる学習活動は教師の活動の方に力が入る結果になるようである。教師が説明して、生徒がわかるという気持ちになるわけである。つまり生徒は受動的になる。これがまたいわゆる教師中心主義といわれる所以でもある。

(三) あまりにも教材主義でありすぎる

教材の解説ということで、生徒がわかればよいという学習指導観は、教材にのみ目がつき、生徒の学習活動が視野から消えることになる。そこに、教材が過多になるという現象が生じる。また教材のならば方のみが目がつき、生徒の見たり、考えたりする行動の仕方から教材をみるという観点がなくなる。例えば社会科では、農業とか工業とか、商業とかという対象にのみ目がつき、それを如何に認識するかという認識の活動のあり方は見失われる。こうして注入主義といわれるような結果を生み出す。

(四) 練習ということが見失われる

注入主義ということになって来ると、見方考え方の訓練という考え方がうすれる。行動が定着する練習ということが、社会科や理科などには極めて稀薄である。

また行動の定着という点からする教材の排列と、注入主義からの教材の排列は相当にちがわねばならないと思われるが、わが国ではさきにも述べたように、教材の排列は対象の側からのみ考えられている。

(五) ワン・プロセスということ

教育は一回主義である。一通り教材の解説をし、わかったという気持になれば、それで終わったということになる。

教材もまた重複ということを非常にきらう。しかし、くりかえしということによって—それは単なる機械的なくりかえしではないにしても—行動が定着するのではないだろうか。

このことは、学校で行う学習指導は、行動の定着に対しては、極めて意味が薄いということになりはしないか。行動の定着はむしろ学校を出て、家庭での復習や試験勉強にたよっているということになると、学習指導は定着のための導入ということになりはしないか。

(六) 一斉に進むということ

一回主義の教材解説という点で学習指導が行なわれると、授業は一斉に行なわれることになるが、それが、結果として、教育対象の能力の差、学習速度の差を無視するという結果になりはしないか。練習させ、時間をかければ、学習を成立させることができるのに、一斉に教材解説をして、教育は恰も分列行進のように行なわれるものという錯覚を生みはしないか。こうして、学習指導は、教育対象のバリエイティに合わせる方法を見失う結果となると思われる。

(七) 人間にはさまざまな行動が必要であることが見失われる

さまざまな行動力を人間に育てる必要があると思われるが、すべてがワン・プロセスの教材解説主義で進められる結果になる。たとえば道徳というような行動を育てる学習指導も、とかく教材解説主義によってのみ考えられる結果となる。

(八) 視聴覚教材の利用の限界

教科書以外の様々な教材を使用しても、それも結局は、教材解説の線を出ないことになる。視聴覚教材なども結局は、ワン・プロセスの解説的教材としてしか、或は注入のための教材としてしか利用されないし、またそういう作成のされ方しかしない。これらの教材のもつ性格がこうして見失われるのではないか。これらのものがすべて言語教材の挿絵的意味しか持たないことになるのではないか。

(九) プログラム学習の方向

プログラム学習というのは、或る一つの形式を言うのではないと考えるべきであろう。形式として考えるならそれはまだはじまったばかりで、これから発展するべきものであって、これから形が生れるというべきではないか。

われわれは、生徒のドゥーイングとか、ドゥーイングを引きおこす教材の提出の仕方とかを工夫することが大切だと思われる。一人の教師が教材の解説者であり、また教材そのものであり、生徒のコントローラーであるという形で進める授業しか考えられない現代の授業を反省することが大切であろう。